

はじめに 古くて新しい、絶望的で魅力的な場所。

はじめてここを訪れた人には、よくこんなことを言われます。

「石巻から1時間もかかる辺境のまちに、こんなに多種多様な人が集まるなんて！」

「ここで出会った人とは、深いところであつながつている感じがしています」

「どこで会っても気心が知れた良い仲間でいられる感じがします」

「引っ込み思案の娘がいろんなことにチャレンジする姿にびっくり」

「子どもがなんでも自分でやるようになりました」

「息子がたくましくなったような気がします」

「ここで外国の子どもたちに出会うとは思わなかったなあ」

「子どもが『生きるということを学んだ』と言っています」

「とにかく、食事のおいしさに感動した！」

「元気をもらいました」

「人の幸せや、何のために働くのかということを考えさせられました」

私が暮らし、働き、多くの人をご案内しているこの地域の名は、おがつ雄勝。

2011年3月11日の東日本大震災で壊滅的な打撃を受けた、宮城県石巻市の小さな港町です。

このまちで私は、こどもたちが豊かな自然と地域の人々にふれ、漁業や農業、林業の体験を通して循環する暮らしを学ぶ複合体験施設、「モリウミアス」の運営や、地域を元気にするさまざまな活動に携わっています。

モリウミアスは、築93年の、以前は小学校だった木造の建物を、地元の方々をはじめ首都圏の方々、総勢のべ5000人の人と一緒にほとんど手作業で改修してつくった施設です。

モリウミアス(MORIUMIAS)という名前には、「森と、海と、明日へ」という意味が込められています。森や海にふれて、明日を創る、未来を創る学びの場所というわけです。「アス」の英文表記が「US」となっているように、「私たち」という意味も込められています。この名前は、地元の人たちや全国各地から集まった人たち、さらにははるばる海外から来てくれた人たちも含めて、大勢の人と一緒に考えたものです。みんなで明日を創る。そんな取り組み、活動自体がモリウミアスです。

モリウミアスの裏手には森があり、庭には田んぼがあります。私たちはそこで無農薬で古代米を育てたり、20年前の畑で最近まで雑木林となっていた平地を開墾して作った畑で野菜を育てたり、かつて教員宿舎だった平地と斜面を利用して豚を放牧したりしています。お風呂や暖房の燃料として、山で木を間伐したり、まきを割ったりもします。

モリウミアスからは海が見えます。高台にあるここから眺める雄勝の海は穏やかでとても美しく、見ているだけで明日への希望がわいてくる感じがします。モリウミアスに来たこともたちは、この海で漁師さんと一緒に、ホタテの水揚げや、ワカメの収穫、牡蠣の稚貝の投入、秋鮭の定置網など、いろんな漁師の仕事を体験します。

そうして得られた食材を、みんなで調理して、いただくのです。

生ごみは堆肥に、生活排水は自然浄化設備できれいにして、田んぼに使います。

このように、モリウミアスでは、人の暮らしと自然とのつながりを実感できます。農業、林業、ものづくり、などなど。こどもたちが、現代ではなかなか得にくくなった、「生きる」ということにリアルに結びついた学びを得られる場所になっています。

もっとも、私たちが提供しているのは、こどもの学びだけではありません。週末に親子で参加できるプログラムもありますし、ビジネスパーソンや行政に携わる方々の研修としても、大勢の方にこのまちにお越しいただいています。

研修で来られる方々には、主に漁師さんのお手伝いや施設の改修作業をしていただいています。地域の課題を解決するための方法を考えていただいたりもします。漁師さんの仕事は、もちろん体力も使いますが、状況を察して動く瞬発力や想像力、リスクへの感覚、チームワークなども求められます。

「とてもハードだけど、一生ものの大きな学びがある」と、好評です。

こどもも、大人も、何もないところで、いろんなことを学べるのです。

## 未来をつくる現場

雄勝の建物の8割は、津波に流されました。

もともと4300人いた人口は、震災後、1600人にまで減りました。

地域住民にこどもはほとんどおらず、お年寄りが大半です。

震災前は60店舗あった商店街は、今では数店しか残っていません。

仕事がないので（これは震災前からでしたが）、漁師さん以外の多くの人は、まちの外に働きに出ています。

震災から5年を経ても、まちの風景が昔に戻ることはありません。かつて人が住んでい

た場所には今、草原が広がっています。最近では、山からシカが下りてきて、わがもの顔で草を食べていたりします。説明を聞かなければ、そこにかつて住居や商店があったことなど、思いもよらないでしょう。

にもかかわらず、このまちには今、不思議な活気があります。

漁業をふたたび盛り上げようとがんばる漁師たち。

研修やボランティアとしてやってきて駆け回るビジネスパーソンや行政官たち。

これまでにない体験を求めて日本各地、世界各国から訪れる子どもたち。

新しい地域のあり方、まちづくりのヒントを探しにくる人たち。

何も具体的なことは見えていないけれど、社会をよくするような、あるいは自分の将来を切り拓くような、なんらかのアクションを起こしたいと思っっている若者たち。彼らは復興のためとか支援したいからという理由ではなく、楽しいから来る、楽しいから集まっているようです。

一度はまちを離れたものの、ふたたび希望をもってここで暮らしはじめた人たち。

多種多様な人々が、すべてを失ったかにも思われた、この小さなまちに集まってきます。そして、ともに学び、語り合い、地域に、あるいはそれぞれの仕事や人生に、なんらかの変化を起こしはじめる。モリウミアスを中心に、雄勝は今、そんな場所になっているので

す。ここはただの「被災地」ではなく、「未来をつくる現場」。そして、現代の暮らしでは得がなくなつた体験をすることができ、「今、目の前のリアル」。私はそう思っています。（でも、地震があつたことは事実ですので、2012年以降は「被災地」とは言わず「震災地」と呼ぶことにしました。）

「雄勝でなにかすごいことが起きているらしいぞ」

「雄勝って、何県の何市にあるかもわからないけど、聞いたことがある」

「雄勝っていう名前、この前ニューヨークでもだれかが話をして聞いたのを聞いた」

そんな評判が人から人へと伝わって、今ではまちの人口を大きく上回る、年間何千人もの人々が、このまちを訪れます。林芳正元農水大臣や小泉進次郎農水部長（元内閣府大臣政務官兼復興大臣政務官）、根本匠元復興大臣、竹下亘元復興大臣、高木毅元復興大臣など国の要人から全国の地方自治体関係者、企業など多くの方々が毎日のように視察にいらつしゃいます。

そして多くの人が、「なぜ、仙台から100キロメートルも離れた、同じ石巻市の市街地から車で1時間もかかるような場所でこんなことが？」と驚くのです。

またある人は、こんなことを口にします。

「震災地の問題は、実は震災前からあつた日本の地域課題なのかもしれない。この地は、

課題解決の先進地なのかもしれない」

「震災ですべてが流された、陸の孤島のような場所でもできるのだから、自分のまちでも  
必ずできるはずだ」

### 無我夢中の5年間

実をいえば、私もちょっと驚いています。

5年前にここに移り住んだころ、今のような状況が生まれるなどとは、想像することも  
できませんでした。そもそも私は、震災が起こるまで、雄勝とはとくに何の関係もなかつ  
たのです。

仙台で暮らしていた母と妹の無事をたしかめるため、東京から慌ててやってきたのがす  
べてのはじまりでした。震災地を見て、いてもたつてもいられず炊き出しのボランティア  
を始めて、そこで雄勝の人に出会って……たまたまかわることになったこのまちで、途  
方もなく厳しい境遇にありながらも気丈に前を向き、それぞれにできることに全力で取り  
組む人たちの姿、感謝の気持ちを失わずたくましく生きることでもたちの姿に心を打たれ、  
何かに導かれるようにして、ここまでやってきました。

若いころからビジネスへの関心が強く、商社に6年間勤めてから独立し、食品流通の会社を起業。ベンチャー企業の経営者として、大きな売上と利益を上げるため、1日3時間の睡眠と決めて年間365日24時間、休みなく働いていた時期もありました。その10年後に社長をやめさせられるという大きな挫折を経て、ふたたび事業を起こして、さあこれからというところで、震災は起きました。20年間、東京で働いていましたが、震災から4か月後、私は雄勝に住民票を移しました。

移住して、腰をすえて現在の活動を始めたとき、多くの人から「キャリアはどうなの?」とか、「いつまでやるつもり?」と聞かれました。「ビジネスの第一線」から、東北の小さな田舎町へ。私の選択を「理解できない」と言う人も多くいました。「そんなことをしていて大丈夫か。将来が不安にならないのか?」と言われたこともあります。

実際、最初はビジョンや計画のようなものはありませんでした。ただ私は、震災地で見えた光景にショックを受け、人々の姿に心を動かされ、とにかく自分にできることをしよう、目の前のことをやりきろうと思ひ、あれこれ考えることをやめて、もがきながら、ただ必死に動き続けてきたのです。

当然、うまくいかないこともたくさんありました。それでも、いつもだれかに助けられ、どうにか道が開けて、活動は私の想像を超えて大きく広がっていきました。そして私は、

東京で働いてきた20年間よりもはるかに大きな充実感と幸福感をもって、働けるようになりました。

震災からの5年間でふりかえるとき、雄勝の変化、そして自分自身の変化に、私はあらためて驚き、人生のふしぎな巡り合わせを思わずにはいられません。

この本では、そんな驚きでいっぱい田舎町のできごとを中心に、5年間に私が経験してきたこと、気づいたことを、みなさんにお話ししていきます。

### こんな人に読んでほしい

雄勝には実にさまざまの人がやってきました。そしてだれもが、何かしらの学びや気づきを得て帰っていかれるようです。

みなさんが言われる「ここで感じたこと、気づいたこと」は、さまざまです。復興や地域活性化、コミュニティづくりについての気づきを得たと言う人もいれば、教育や育児についてヒントをもらったと言う人もいます。ご自身の生き方や働き方を考える手がかり、あるいは会社の経営や組織の運営、将来の企業のあるべき姿についての学びを得たと言う人もいます。

ですから、この本を読んでほしい人もさまざまです。

東北の震災地の復興に、自分にできる何らかのかたちで貢献したい人。

地域活性化やまちづくり、コミュニティづくりに関心がある人。

どんな分野であれ、社会をよくするために何か行動したいと思っている人。

企業のなかで働きながら、社会に貢献したいと思っている人。

ビジネスを通じて社会課題を解決することに意欲がある人。

自治体や省庁など、行政の現場で働いている人。

会社の利益と社会貢献の両立が社員のやる気を高めると思う経営者や管理職の人。

こどもの「生きる力」を育む教育や人材育成に関心がある人。

日本のため、日本の未来のために何かしたいと思っている人。

すでに社会をよくするために何か行動している人。

会社の中でも外でも生き生きと活動したい人。

社会貢献活動を、社外ではなく、会社内の「本業」としてやりたいと考えている人。

遊ぶように、楽しみながら、やりがいのある仕事をしたい人。

転職を心のどこかで考えている人。

就職活動をしている人。就職について悩んでいる人。

身近なまわりの人を大切にしたいと思っている人。

興味はあるのに社会貢献をちょっと胡散臭いとか偽善だとか思っている人。

……あげればキリがありません。突き詰めていえば、社会のために何かしたいと思っている人、自分の人生を有意義に使いたいと考えている人であればだれでも、私がメッセーヂを届けたい相手になります。

実際、私はこの5年間、会う人にはだれでも、こう声をかけてきました。

「一度、雄勝に来てみてください」

雄勝に来て、私たちのしていることをご覧いただくのが、私の伝えたいことを伝える、いちばんよい方法だと思っていますのです。

なぜ、だれにでも声をかけるのか。それは、目の前のひとりの人が動くこと、そして人と人がつながり合うことから、大きな変化が生まれることを、実際に見てきたからです。

「ひとりの力を信じる」。そして「人のつながりを信じる」。これが私の信条なのです。

だれでもすぐにお誘いするので、本気と思わずに「じゃあ近いうちに行きますよ」などと答えてしまい、私から「では今週末の何時にここで待ち合わせましょう」と連絡がきて驚いた人もたくさんいるはずですよ。

とはいえ、すべての方にいきなり雄勝までお越しいただくのは難しいですよ。そこで、

この本を書くことにしました。

この本は、雄勝というちよつと変わったまちへの、そして願わくは、みなさんひとりひとりにとつての「未来づくりの現場」への招待状なのです。